

仕事や組合活動にあらたな気づきをもたらし 交流の大切さを実感

～「つどい つながり 未来を切り開く！」
北海道・東北ブロック「青プロ」 in 札幌～

北海道・東北ブロック協議会

「北海道につどい交流したい！」との思いではじまった北海道・東北ブロック「青年未来づくりプロジェクト」は11月12日・13日にやっと実現しました。

10月から新型コロナ第8波のきざしがあらわれ、特に北海道では感染者数が全国でトップとなりました。「青プロ」開催そのものが危ぶまれたなかで、集会の成功は参加者そして実行委員の大きな充実感となりました。

県事務所からの参加は実現しませんでした。5 地方組織 19 単組から予想を上回る 83 名が参加。女性が4割、そして日頃、あまり組合行事に参加していない青年の参加が多数あったことが特徴点です。

参加者アンケートには「年齢的に最後の青プロかと思うが、参加できて本当に良かった」「他自治体との交流は貴重で刺激となった」「今後の活動や仕事で意識を高めていきたい」「さまざまな考えを聞き自分の視野が広がった」「単組に持ち帰り組合員と共有したい」との声が多数を占め成功と言えるものでした。同時に、「コロナ禍のなかで交流できなかった単組間の交流が存分にできた」「コロナの影響で入庁以来研修などはすべてがリモート。他市町村職員との交流は貴重な経験」「早くコロナが終息してイベントが増えてほしい」など、

長期にわたるコロナ危機のなかで、若者の閉そく感や誰かとつながりたい、話がしたいとの思いを強く感じる声もありました。

また、「自分の仕事が住民のためになっているかを常に考えていきたい」「たくさんの気づきがあった。今後の仕事に活かしていきたい」など、講演やグループワークをとおして、民主的自治体労働者論を考える一端になったことも貴重です。「青プロ」の目的である、自治労連運動の継承・発展をめざし、青年がつどい学んでいく契機となったことを確信にしたいと思います。

さまざまな企画をとおして「交流と学び」を深める

「青プロ」を企画するうえで重視したのは「交流と学び」です。集合場所を札幌市郊外の「開拓の村」にし、フィールドワークとして、北海道開拓の歴史を学芸員の説明や施設



見学をおして学びました。「開拓の村」は漫画『ゴールデンカムイ』の聖地としても有名で、QRコードを駆使しながらモデルコースや聖地巡礼コースを散策しました。

東急REIホテルを会場にした夜の交流会では、コロナ対策にも留意しての運営でした。また、参加者の座席は翌日のグループワーク別に配置を工夫したことから、地方組織を超えての意見交流と懇親をより深めることができます。「北海道あるあるクイズ」や「大抽選会」では、各県道の名産品を景品として準備、大いに盛り上がり、あっという間の時間を過ごしました。

翌日は、元自治労連書記長の中川悟さん(臨時中執)を講師に「人類史からひも解く労働組合、自治体労働者 ～団結こそ人類の本能～」をテーマに、記念講演がおこなわれました。人類誕生からの進化の歴史をもとに、人間が集団で生きることになった経過から団結の必要性を説くとともに、一方で侵略と戦争、植民地主義など人間の愚かさにも触れました。コロナ禍と格差社会が広がるもとの、社会の孤立から住民を守り希望をもたらすのが公務労働者の役割であることが強調されました。参加者からは「私たちに求められていることやあり方を見直すことができた」、「人類史からひも解くことによって、労働組合についてより深く知ることができた」「伺えなかった考えも含め論文等をおして知りたい」などの



感想が寄せられています。

その後のグループワークが参加者から意外に好評だったことには驚きでした。交流会テーブルごとのグループで「自分たちにとって良い仕事とは」と「働きやすく、誇りが持てる職場とは」をテーマに意見交流しました。参加者の75%はグループワークに「満足」と回答し、「気軽に意見が言えて良かった」「テーマも考えやすく、自分の気持ちを考え直す機会になった」「他自治体の意見を今後の業務の参考にしたい」などが寄せられています。ここにも、職場や仕事、自分の考えをリアルに伝えたいとの思いが強いことを表われています。

最後のエンディングセレモニーでは、「北海道・東北ブロックの青年が心をひとつに」との意味を込めた「レインボー旗」(ブロック内の7道県をイメージ)に、一人一人が思い書きこみ、振りかざしたことがより一体感を深めています。

実行委員体制の継続が成功への原動力 青年の思いに応え、継続的なブロック での活動をスタート

今回の北海道・東北ブロック「青プロ」開催をおして、多くの財産と教訓を残しています。

一つには、実行委員の絆が深まり、「青プロ」を成功させようとの思いが日増しに強くなっていったことです。本部の提起を受けブロックで実行委員会を発足させたのは2019年2月でした。実行委員の多くが沖プロやNEXTを経験していないなかで「青プロ」のイメージは理解できるものの何をやればよいのか手探りのスタートでした。最初は事務局主導の実行委員会に終始しましたが、15回に及ぶ

実行委員会開催は次第に相互の信頼関係を強くし、自らが主体的に企画運営、資料準備に携わるように変化していったのです。一部の出入りはあったものの、3年以上にわたって同じメンバーで実行委員会体制を継続してきたことが北海道・東北ブロックの特徴であり成功への大きな原動力です。

コロナ終息の目途がたたず、2021年11月のプレ企画はオンラインでの開催でした。『みんなで乗り越えよう！つながりを力に』をテーマにした「青年オンライン交流集会」では、東日本大震災から見える自治体職員の役割、そしてコロナ禍のなかでも住民のために奮闘する仲間を共有したことが、「青プロ」を何としても札幌でリアルに開催したいとの思いへと導いたと感じています。オンライン集会では、各地方組織の名所や名産、組合活動をフォトムービーに作成し上映したことも、札幌で再会することへの決意と期待を抱かせる役割をもたらしたのです。

二つ目には、組織の強化発展に結びついていくことです。豊浦町職（北海道）が青プロへの参加を呼び掛ける中で2名を組合加入に結び付けたことは特筆すべきことです。また、五所川原市職労では参加者に対して組合執行部に加わってもらうよう働きかけています。ある単組からは「組織強化拡大と結び付けた青プロをもう少し意識すべきだった」との反省も聞かれ、十分な周知期間の確保や開催意義の共有などの面で課題も残りました。

「青プロ」の経験と感動を青年部のなかで広げていく活動も始まっています。参加者による単組での反省会、地方組織での報告会の準備も進められています。秋田県本部青年部は2月に、岩手自治労連でも2月の青年部単組代表者会議で報告会を予定しています。福

島県本部では、これまでできなかった単組間での青年交流、当面は青年スキー・スノボ交流会を計画しており、他の地方組織にも呼び掛ける予定です。

実行委員や参加者からは、「青プロNEXT」等さらなる交流機会を作ってほしいとの意見が寄せられています。例えば、ブロック定期大会と抱き合わせた青年交流集会、ブロックの青年が気軽に参加できるレクレーション開催などです。財政面での課題もありますが、こうした活動をとおしてブロック青年部の確立につながればと考えています。

最後に

労働組合という組織を通じて、青年の思いに応えていくことが今だからこそ必要なのではないでしょうか。自己責任論と競争至上主義の中で育ってきた青年が、「青プロ」を通じて民主的自治体労働者論に触れ、公務労働の本質を考え、日常業務や労働組合活動を見直す機会となっています。今後のブロック、地方組織、単組での組織強化発展や自治労連運動の継承発展につながることを期待します。

